黒猫(エドガー・アラン・ポー)

とずっと興奮しやすくない知性人が、私が畏怖をもって述べ た。 と、 で、 おうなどと期待するのは、ほんとに正気の沙汰とは言えないの経験したことを信じないような場合に、他人に信じてもら ものを認め る事がらのなかに、ごく自然な原因結果の普通の連続以上の 見えるであろう。今後、あるいは、誰か知者があらわれ うとは思わない。私にはそれはただもう恐怖だけを感じさせ らの出来事は、 私の第一の目的は、一連の単なる家庭の出来事を、はっきり 決して夢みているのでもない。しかしあす私は死ぬべき身だ。 と思う。だが、私は正気を失っている訳ではなく、 も思わないし、そう願いもしない。自分の感覚でさえが自分 めて素朴な物語については、 私がこれから書こうとしているきわめて奇怪な、またきわ 私の幻想を単なる平凡なことにしてしまうかもしれ 誰か私などよりももっと冷静な、 そして破滅させた。だが私はそれをくどくどと説明しよ 簡潔に、注釈ぬきで、世の人々に示すことである。それ 今日のうちに自分の魂の重荷をおろしておきたいのだ。 多くの人々には恐ろしいというよりも怪奇なものに ないようになるであろう。 その結果として、 自分はそれを信じてもらえると 私を恐れさせ―― もっと論理的な、 苦し 、もっ ぬ てき また め

きわだっていた。とりわけ動物が好きで、両親もさまざまなていた。私の心の優しさは仲間たちにからかわれるくらいに子供のころから私はおとなしくて情けぶかい性質で知られ

ことのある人の心をじかに打つなにものかがある。ときものを私の思いどおりに飼ってくれた。私はたいでは、単のような愉快さの性質や強さをわざわざ説明する必要はほとた。この特質は成長するとともにだんだん強くなり、大人にた。この特質は成長するとともにだんだん強くなり、大人にれらの生きものを想手にして時を過し、それらに食物をやっれらの生きものを相手にして時を過し、それらに食物をやっとのある人の心をじかに打つなにものかがある。

や、一匹の小猿や、一匹の猫などを飼った。に入れた。私たちは鳥類や、金魚や、一匹の立派な犬や、兎彼女はおりさえあればとても気持のいい種類の生きものを手気質だった。私が家庭的な生きものを好きなのに気がつくと、私は若いころ結婚したが、幸いなことに妻は私と性の合う

つも私だけだったし、彼は家じゅう私の行くところへどこへ私の気に入りであり、遊び仲間であった。食物をやるのはいープルートォ ⑴ ――というのがその猫の名であった ――は

かなり骨が折れるくらいであった。でも一緒に来た。往来へまでついて来ないようにするのには、

私は彼らをかまわなくなっただけではなく、虐待した。 の心づかいはまだあった。しかし私の病気はつのってきて は私を慕って、そばへやって来ると、 ども、兎や、 ものも、もちろん、その私の性質の変化を感じさせられ は彼女の体に手を振り上げるまでになった。飼っていた生き ちになり、 変ってしまった。 ために そのあいだに私の気質や性格は一般に ったものだったのだが、プルートォをいじめないでおくだけ 私と猫との親しみはこんなぐあいにして数年間つづいたが、 ああ、アルコールのような恐ろしい病気が他にあろうか! 妻に対し ついにはプルートォでさえ――いまでは った。私は一日一日と気むずかしくなり、癇に覆も急激に悪いほうへ(白状するのも恥ずかしいが) 他人の感情などちっともかまわなくなってしまっ ては乱暴な言葉を使うようになった。 猿や、あるいは犬でさえも、 遠慮なしにいじめてや ――酒癖という悪鬼の 、なにげなく、 年をとって、 しま けれ

を酒にまぎらしてしまった。

ぐに私の体から飛び去ったようであった。そしてジン酒にお うつった。 した傷をつけた。と、たちまち悪魔のような憤怒が私に とき彼は私 の前を避けたような気がした。 からひどく酔っぱらって帰って来ると、その猫がなんだか私 ある夜、 私は我を忘れてしまった。 の手荒さにびっくりして、 町のそちこちにある自分の行きつけの 私は彼をひっとらえた。 歯で私 生来のやさしい魂は の手にちょ 酒 の っと その の ーつ す IJ

私の不機嫌のとばっちりをうけるようになった。

したがっていくらか怒りっぽくなっているプルート

オでさえ、

ぜい弱い曖昧な感情で、 るしながら、私は面をあからめ、 とその眼窩から片眼をえぐり取った。この憎むべき凶行をし だてられた悪鬼以上の憎悪が体のあらゆる筋肉をぶるぶる震 ふたたび無節制になって、 行の毒気が消えてしまったとき― それを開き、 てなかば恐怖の、 わせた。 朝になって理性が戻ってきたとき――一晩眠って前夜の乱 、私はチョッキのポケットからペンナイフを取り出し、 そのかわいそうな動物の咽喉をつかむと、悠々 なかば悔恨 心まで動かされはしなかった。 間 もなくその行為 の情を感じた。が、 体がほてり、身ぶるい 自分の犯した罪にたいし のすべての記 それもせい する。 私は

哲学は少しも認めてはいない。 うになったことを、初めは悲しく思うくらいに、 とを確信している。 きない本源的な性能もしくは感情の一つ-れから、 とひどく恐ろしがって逃げて行くのだった。 少しもないようだった。彼はもとどおりに家のなかを歩きま 生きて せるためのように、天邪鬼の心持がやってきた。この心持を っていた。 なに自分を慕っていた動物がこんなに明らかに自 わっていたけれども、当りまえのことであろうが私が近づく た眼窩はいかにも恐ろしい様子をしてはいたが、 そのうちに猫はいくらかずつ回復してきた。眼のなくなっ な衝動の一つー いるということと同じくらいに、天邪鬼が人 まるで私を最後 しかしこの感情もやがて癇癪に変っていった。 してはいけないという、 ―人の性格に命令する、 の 取りかえしのつか けれども、 。 私は、 であるというこ ない破滅に陥ら 分つことので 分を嫌うよ もう痛みは 昔の心が残 自分の魂が 前にあん の心

な性向 掟を、 を犯すのだ、 うことがありうるなら るべき神の ていればごぞ、 怒らせるようなことはなに一つしなかったということを感 が私を慕ってい がら、心に痛切な悔恨を感じながら、 をはめて、一本の木の枝につるした。 可解な切望 えようとする 魂の自らを苦しめようとする―― けさせ、とうとう仕遂げさせるように私をせっつい がいま言ったように、 理由で、 すのだ、 なんの罪もない動物に対して自分の加えた傷害をなおもつづ 最善の判断に逆らってまでも、その掟を破ろうとする永続: 人はどんなにかしばしば気づいたことであろう。 単にそれが。掟であると知っているだけのために、 自分が邪悪な、あるいは愚かな行為をしていること 持って 無限の慈悲の であったのだ。ある朝、 自分 あったのだ。ある朝、冷然と、私は猫の首に輪索――悪のためにのみ悪をしようとする、この不 ということを知っていればごぞ、 つるしたのだ。 たということを知っていればごぞ、 の不滅 い はしないだろうか? この天邪鬼 私の最後の破滅を来たしたのであっ の魂 及ばない彼方へ置く―― ほどにも危うくするような極悪罪 をいとも慈悲ぶか いとも慈悲ぶかく、いとも畏いとも慈悲がない。 それ自身の本性に暴虐を加 つるした。 眼から涙を流 つるした もしそう 猫が たの その の そ、 の 私 しな は、 だ 猫 じ を の

やっとのことでその火災からのがれた。 で眠 まった。 この 家全体が燃え上がっていた。妻と、 りから覚まされ 残酷な行為をやっ 私の全財産はなくなり、 た。 た 日 私 の の 寝台のカーテンに 晩、私は火事だという叫 それ以来私は絶望に身をま 召使と、 なにもかも焼けて · 火 が 私自身とは つい て び 声

> が、| 巨大な猫の姿が見えた。その痕はまったく驚くほど正確にあいてみると、その白い表面に薄肉彫りに彫ったかのように、 ろであった。ここの漆喰だけはだいたい火の力に耐えていた らわれていた。 ようだった。「妙だな!」「不思議だね?」という言葉や、 思った。この壁のまわりに真っ黒に人がたかってい 私の寝台の頭板に向っていた、 行ってみた。 りを詳 るほど、 の他それに似たような文句が、 の人々がその一部分を綿密な熱心な注意をもって調べている ていた。この一カ所というのは、 にしておきたく この しく述べているのであって、 災難とあ 私は心の弱い者では この事実を私は最近そこを塗り換えたからだろうと 。 壁 は、 その動物の首のまわりには縄 ないのであ の 凶行とのあ 一カ所だけ る。 いだに な 火事 い。 私の好奇心をそそった。 をのぞいて、み あまり厚く 家の真ん中あたりにあ のつぎの ――一つの鐶でも不完全しかし私は事実のつなが 因果関係をつけようとす 、ない仕 があった。 6 切 な焼け落ち 私 て、多く 壁 は 焼 の خے る、 跡 そ

かせてしまっ

りは 常なものだった。し えなかったからだが の にやったものだろう。 ŧ は思い出した。 まった。 人でい のにちがいない。 最初この妖怪 な して、開いていた窓から私の部屋 っぱ 猫が家につづいている庭につるしてあったことを私 に 火事の警報が伝わると、 なり、 ―というのは私にはそれ以外のものとは思 これはきっと私の寝ているのを起すため かしあれこれと考えてみてやっと気が安 ――を見たとき、 そこへ他の壁が落ちかかって、 その なかの 私の驚 愕と恐怖とは非 この庭 のなかへ投げこんだ か が 猫 を木 すぐに大勢 から切 私 の残

ぜんできなかったとしても、理性にたいしてはこんなにたやいま述べた驚くべき事実を、自分の良心にたいしてはぜんニアとで、自分の見たような像ができあがったのだ。そうして、その漆喰の石灰と、火炎と、死骸から出たアンモ虐の犠牲者を、その塗りたての漆喰の壁のなかへ押しつけ、

いかと自分のまわりを捜すようにもなった。 なる同じ種類の、またいくらか似たような毛 むようにさえなり、そのころ行きつけの悪所 私の心のなかへ戻ってきた。私は猫のいなくなったことを悔 いだ、悔恨に似ているがそうではないある漠然とした感情 の猫の幻像を払いのけることができなかった。そしてそのあ 印象を与えたことに変りはなかった。幾月ものあいだ私はそ すく説明したのであるが、それでも、 ぜんできなかったとしても、 理性にたいしてはこん それが私の想像に深 並 の でそれの代りに ŧ のがい なに が、 な い

は、 酒の大樽の上に、 れているのだ。 毛が一本もなかったが、この猫は、 で彼にとてもよく似て らいの大きさは十分あ それは一匹の黒猫 なのであった。 ぺんのところをじっと見ていたので、いま私を驚かせたこと つぜん注意をひかれ ある夜、ごくたちの悪 自分がもっと早くその物に気がつかなかったという事実 ぼんやり その部屋の主な家具をになっているジン酒かラム 私は近づいて行って、それに手を触れてみた。 た形ではあるが、 なんだか黒い物がじっとしているのに、 た。 い 非常に大きな猫 、私はそれまで数分間その大樽 た。 しい 一つの点をのぞいて、あらゆる点 酒場に、なかば茫然として プルー ŀ 胸のところがほとんど一 大きな、 ォは体のどこにも白 ―で、プルートォく 斑点で蔽わ 腰か の てっ ع け

> やった 猫だった。 ごろ咽 とも知らないし! 私がさわると、 が主人はその猫を自分のものだとは言わず、 のを喜んでいるようだった。 喉を鳴らし、 私はすぐにそこの主人にそれを買いたい その猫はすぐに立ち上がり、 私の手に体をすりつけ、 いままでに見たこともないと言うのだっ これこそ私 私 の探 さかんにごろ が 目 をつけて と言い出 している ちっ

非常なお気に入りになった。いてやった。家へ着くと、すぐに居ついてしまい、すぐ妻ののままにさせ、歩いて行く途中でおりおりかがんで軽く手で吹その動物はついて来たいような様子を見せた。で、ついて来私は愛撫をつづけていたが、家へ帰りかけようとすると、

をかえって厭がらせ、うるさがらせた。 行為の記 た。私はその動物を避けた。 だかは知らないが ととは正反対であった。しかし かに湧き起るのに気が から逃げるように、 の かった。 たのだ。 でうるさいという感情が嵩じてはげしい憎しみになっていっ ない嫌 私はというと、 がしだいしだいに 数週の 憶とが、 の情をもってその猫を見るようになり、悪疫 間 間もなくその猫に対する嫌悪の情が心 私にそれを肉体的に虐待しな 私は打つとか、その他手荒なことは その忌むべき存在から無言 猫がはっきり私を好いていることが私 ついた。 ある慚愧の念と、 これは自分の予 ごくゆっくりと ――どうしてだか、 だんだんに、この厭 想してい のままで逃げ いようにさせ 以前 の残酷な またなぜ のな

いもなく、その動物に対する私の憎しみを増したのは

出すようになった。

わり、 いくら り、あるいはその長い鋭い爪を私の着物にひっかけて、胸のこうとすると、両足のあいだへ入って、私を倒しそうにした 眼 しては しまいたかったけれども、そうすることを差し控えたの ところまでよじ登ったりする。そんなときには、 こへでもいまいま にうずくまったり、 いであった。 よ私を好くようになってくるようだった。 ぶかい気持を、 もっとも単純 あった。 の事がらのため が しかし、 ない そのしつこさは読者に理解してもらうのが困難なくら か自分の 妻は、 ということを発見したことであ 私がこの猫を嫌えば嫌うほど、 あっさり白状してしまえば な、 私が腰かけているときにはいつでも、 前にも言ったように、多分に持っていたの にそ 以前 以前は私のりっぱな特徴であり、 しくじゃれついたりした。 もっとも純粋な快楽の源であったあ れはま あるい の 罪悪を思い出すためであったが、 は膝の上へ上がって、しきりにど すます妻にかわ った。 猫のほうはい 私 そ いがられるだけ の動 立ち上がって歩 のあとをつ け 物 殴り殺 また多くの れども、 椅子の下 がほ の 主と して けま ょ 慈悲 んと だ。 で 恐ろし だ! に は

それ

を家

へ連れてきた翌朝、

それにもプルート

オのように片

は、 あった。 らない。 それでもそのほかにそれをなんと説明してよいか私 かしいくらいだが 実にくだらない一つの妄想のために強められていた 怖さは肉体的災害の怖さとは少し違ってい 私は告白するのが恥ずかしいくらいだが 人 その猫と前に殺した猫との唯一の眼に見える違 の の なかにあってさえも、 その動物が私の心に起させた恐怖 告白する ――そうだ、 た、 の には が の · の念 恥ず わか が、 で

った呵責に押しつけられて、

私のうちに少し

ば

か

U)

うに

怖

か

ったためであった。

恐ろし るような物の格好になった。 せっていたのだが ことを、 斑点のことで つけてしまい に、私はその怪物を嫌い、 した輪郭となった。それはいまや私が名を言うも身ぶ いあいだ私の いえば、 あったが、 い刑 い ほとんど眼 読者は記憶せられるであろう。 さっき話 具の形になったのだ! お もとは お、 たいと思ったのであるが、 理性は 何度か私 もの凄い物の 恐怖と罪悪との につかないほどにゆっくりと、そして、 したあの白い毛の斑点なのだが、 ---それが、とうとう、 それを気の迷いだとして否定しようとあ たいへんぼんやりした形 に注意し 恐れ、できるなら思いきってやっ 患との――苦悶と死との痛!――絞首台の――形にな! ――そして、 っ い ところが、 この とりわけこのため まったくきっぱ それは 斑点 であっ 形になったの は、 だんだん たという 妻はその まや、 大きく ま る す

心臓の上に圧しかかっているのだった!私には払い落す力のない悪魔の化身が-とも私 やったのだ あった。 なく恐ろしい夢から毎時間ぎょっとして目覚めると、 恵というも い苦痛を与えるとは って造られた人間である(2)私に の 熱い息が そしていまこそ私は実に単なる人間 を一人にしておかなかった。 一匹の畜生が 自分の の を知らなく 匹の 顔 に 畜生が私に か かり、 ああ ―その仲 なった! Ţ そのど 間 昼も夜も私は この奴を私は傲然と殺しているの惨めさ以上に惨めで 夜には、私 昼間 いと高 つ かくも多くの堪えがた しりし は かの き神の つも は傲然と殺し は言い もう安息の た重さが 動 物が ŧ そ ち ようも よっ

残っていた善も敗北してしまった。 まかせたのだが、 度もとつぜんに起るおさえられぬ激怒の発作に盲目的に る物やあらゆる人を憎むようになった。 私のいつもの気むずかしい気質はますますつのって、 友となった、 なんの苦情も言わない私の妻は、 もっとも暗黒な、 邪悪な考えが私の唯一の もっとも邪悪な考え そして、 いまでは幾 あらゆ 身を が

たのだった。

それを誰よりも

いつもひどく受けながら、

辛抱づよく我慢

ああ

ĺ

き声もたてずに、 いる腕をひき放し、 邪魔立てに悪鬼以上の憤怒に駆られて、私は妻につかまれて しまったろう。が、 たとおりに打ち下ろしたなら、もちろん、 物をめがけて一撃に打ち下ろそうとした。 ていたあの子供らしい怖さも忘れて、 はかっと激怒した。 う少しのことで私を真っ逆さまに突き落そうとしたので、 仕方なく住んでいた古い穴蔵のなかへ、私と一緒に降りてき ある日、 猫もその急な階段を私のあとへついて降りてきたが、 妻は な その場で倒れて死んでしまった。 にかの その一 斧を彼女の脳天に打ちこんだ。 怒りのあまり、 家の用事で、貧乏のために私たち 撃は妻の手でさえぎられた。 これまで自分の手を止 斧を振り上げ、 それを自分の思っ 猫は即座に死 彼女は呻 その この んで 動 私 ŧ が め

> 穴蔵の壁に塗りこむことに決めたのだ。 普通やるように荷造りして、 犠牲者を壁に塗りこんだと伝えられているように なかへ投げこもうかとも れを埋める穴を掘ろうと決心した。さらにまた、庭の井戸の いと思われる工夫を考えついた。 かとも、考えてみた。最後に、これらのどれよりもずっとい 運搬人に家から持ち出させよう 商品のように箱のなかへ入れて 中世紀の僧侶たちが彼らの それを

けて、 めにできた、突き出た一カ所があった。ここの煉瓦を取りのころと同じようにしてある、見せかけだけの煙突か暖炉のた られたばかりで、 ていない は、造作なくできるにちがいない、 の壁はぞんざいにできていたし、近ごろ粗い漆喰を一面 つからないように、前のとおりにすっかり壁を塗り潰すこと そういった目的にはその穴蔵はたいへん適 死骸を押しこみ、 のだった。その上に、 空気が湿っているためにその漆喰が固 誰の目に 方の壁には、 もなに一つ怪しいことの見 と私は思った。 して い た。 の 他 [まっ のた に塗 そこ の غ

をこしらえ、それで新しい煉瓦細工の上をとても念入りに塗 その位置に支えておきながら、大した苦もなく全体をもとの と、毛髪とを手に入れると、前のと区別のつけられない漆喰 すく煉瓦を動かし、内側の壁に死体を注意深く寄せかけると、 とおりに積み直した。 った。仕上げてしまうと、万事がうまくいったの そしてこの予想ははずれなかった。鉄梃を使って私 できるかぎりの用心をして膠泥と、砂 に満足した。 は

近所

、 々 の

目にとまる恐れ

なしには、それを家から運び去 私にはわかっていた。

いろ

昼でも夜でも、

きわめ

て慎重に、

この恐ろしい殺人をやってしまうと、私はすぐに、

死体を隠す仕事に取りかかった。

ることができないということは、

で焼いてしまおうと考えた。

いろの計画が心に浮んだ。

あるときは死骸を細かく切って

またあるときには穴蔵の床にそ

見まわして、こう独言を言った。

|屑はごく注意して拾い上げた。

私は得意になってあたりを

「さあ、

これで少なく

とも今度だけは言の骨折りも無駄じゃなかったぞ」 次に私のやることは、 かくまでの不幸の原因であったあ の

獣を捜すことであった。とうとう私はそれを殺してやろうと しの重荷を負いながらも眠ったのだ! だけは、 そのために、 である。 の感じは、 るい動物は私のさっきの怒りのはげしさにびっくりしたらし ができたなら、そいつの命はないに決っていた。が、 堅く決心していたからである。そのときそいつに出会うこと ったために私の胸に生じた、深い、この上なく幸福な、 いるようであった。 私がいまの気分でいるところへは姿を見せるのを控えて 私はぐっすりと安らかに眠った。そうだ、 猫はその夜じゅう姿をあらわさなかった。 記述することも、 あの猫を家へ連れてきて以来、 その厭でたまらない生きものがい 想像することもできないくらい 少なくとも一晩 魂に人殺 6、安場と そのず で、

家宅捜索さえ一度行われた、――が無論なにも発見されるはかった。二、三の訊問は受けたが、それには造作なく答えた。もなかった! 自分の凶行の罪はほとんど私を不安にさせな私はもうあいつを見ることはないのだ! 私の幸福はこの上あの怪物は永久にこの屋内から逃げ去ってしまったのだ! は出てこなかった。もう一度私は自由な人間として呼吸した。二日目も過ぎ三日目も過ぎたが、それでもまだ私の呵責者

て、私はちっともどぎまぎしなかった。警官は私に彼らの捜た。けれども、自分の隠匿の場所はわかるはずがないと思っ警官が家へやって来て、ふたたび屋内を厳重に調べにかかっ殺人をしてから四日目に、まったく思いがけなく、一隊の

ずがなかった。

私は自分の未来の幸運を確実だと思った。

端から端へと歩いた。 私の心の歓喜は抑えきれないくらい強かった。 きまわった。警官はすっかり満足して、引き揚げようとした。 ている人の心臓のように穏やかに鼓動していた。 私は体の筋一つ動かさなかった。 < 索について来いと命じた。彼らはすみずみまでも残るくまな つもりでたった一言でも言ってやり、 、捜した。 とうとう、三度目か四度目に穴蔵へ降りて行った。 腕を胸の上で組み、 私の心臓は罪もなくて眠っ また自分の潔白を彼ら あちこち悠々と歩 私は、 私は穴蔵を 凱が 歌か

に確かな上にも確かにしてやりたくてたまらなかった。

言って、 られんことを望みます。ときに、皆さん、これは きに、言った。「お疑いが晴れたことをわたしは嬉しく思いま くたたいた。 と言っていいでしょうな。この壁は とんどわからなかった〕――「すできによくできている家だ す。皆さん方のご健康を祈り、それからも少し礼儀を重ん ょうど愛妻の さんー いはげしい欲望を感じて、 なかなかよくできている家ですぜ」〔なにかをすらすら言いた 「皆さん」と、とうとう私は、 ―この壁はがんじょうにこしらえてありますよ」そう ただ気違いじみた空威張りから、手にした杖で、 死骸が内側に立っている部分の煉瓦細工を、 私は自分の口にしていることがほ 一行が階投をのぼりかけたと お帰りですか? ――これは

声であったが、それから急に高まって、まったく異様な、人り泣きのように、なにかで包まれたような、きれぎれな叫びら一つの声が私に答えたのであった! ――初めは、子供の啜の打った音の反響が鎮まるか鎮まらぬかに、その墓のなかかだが、神よ、魔王の牙より私を護りまた救いたまえ! 私

泣 間 るもの 悪魔との の もの 慟哭するような悲鳴 と思われるような、 咽喉から一緒になって、ただ地獄地獄に墜ちてもだえ苦しむ者と、ではない、一つの長い、高い、連 ――となった。 なかば恐怖の、 ただ地獄からだけ聞えてく 連続した金切声とな なかば勝 利の、

壁はそっくり落ちた。もうひどく腐爛して血魂が固まりつい瞬間には、幾本かの逞しい腕が壁をせっせとくずしていた。 あのいまわしい獣が坐っていた。そいつの奸策が私をおびき のだった! したのだ。 の頭の上に、 反対の側の 私自身の気持は語るも愚かである。気が遠くなって、 で人殺しをさせ、 る死骸が、 極度の その怪物を私はその墓のなかへ塗りこめておいた 、恐怖と畏懼とのために、じっと立ち止った。 壁へとよろめいた。一瞬間、 赤い口を大きくあけ、爛々たる片眼を光らせて、 そこにいた人々の眼前 そいつのたてた声が私を絞刑吏に引渡 にすっくと立った。 階段の上にいた一行 次の 私は

2 1 いい給いけるは我儕に象りて我儕の像のごとく我旧約全書創世記第一章第二十六——二十七節、「神 儕人を造り……と、 即ち神の像の如くに之を造り云々」 ーマ神話の下界の王。 神その像の如くに人を創造たま 冥府の王の

П